ヒエロニュムス「ウルガータ聖書序文」翻訳と注解（4）

エステル記、ヨシュア記、トビト記、ユディト記、福音書、パウロ書簡

Jerome's Prologues of the Vulgate: Japanese Translation with Commentary (4)
Esther, Joshua, Tobit, Judith, Gospels, Pauline Epistles

石川 立　　加藤 哲平
Ritsu Ishikawa　Teppei Kato[1]

キーワード
ヒエロニュムス、聖書、ウルガータ、序文、エステル記、ヨシュア記、トビト記、ユディト記、福音書、パウロ書簡

KEY WORDS
Jerome, the Bible, the Vulgate, Prologue, Esther, Joshua, Tobit, Judith, Gospels, Pauline Epistles

エステル記の序文

解　題

ヒエロニュムスは、LXX あるいは古ラテン語訳のエステル記には多くの付加部分があることを批判している。実際、ギリシア語のエステル記には、「モルデカイの夢」「エステルの祈り」など、ヘブライ語原典を敷衍したような内容が多く含まれている。一方、ヘブライ語を底本とした自身の翻訳は、原典に忠実に「言葉から言葉へ」（verbum e verbo）訳したものであり、「いかなる言葉も付加して増やしたりは」していないと言明する。すると当然ながら、「普及版」に慣れ親しんだ多くの読者からの大きな非難が予想されるが、彼はそのような者たちの「脅し」（minae）を恐れたり

はしないと言い切っている。序文自体は、404年頃にパウラとエウストキウムに宛てて書かれた。パウラも名宛て人に入っていることから、少なくとも彼女の死後に書かれた「ヨシュア記の序文」よりは以前のものであることが推測できる。

翻　訳

エステル記の序文が始まる

エステル記は、様々な翻訳者たちによって損なわれてしまったままである。これを私はヘブライ人の記録保管庫から取り上げて[1]、より簡潔に言葉から言葉へと翻訳した[2]。しかし普及版[3]〈vulgata editio〉はというと、だらしない冗漫な言葉の縄でこの書物をあちらこちらに引っ張りまわし、その都度言われ得ることや聞かれ得ることを付け加えてしまっている。それはちょうど学校の授業でいつもやっていたように、ある（裁判などに関する）論題を取り上げて、損害を被った者と損害を与えた者とがどのような言葉を使い得るかを考え出すのに似ている[4]。

しかし、おおパウラとエウストキウムよ、あなたがたはヘブライ人の図書館に通いつめて翻訳者間の論争を確認しているので、エステル記がヘブライ語の書物だと（正確に）理解している。それゆえに、個々の言葉に注意して我々の翻訳をよく見ていただきたい。そうすれば、私がいかなる言葉も付加して増やしたりせず、信頼できる証言のみによって、ヘブライ語（のエステル記）通りに、ヘブライ語の歴史物語をラテン語に伝えたと知ることができるであろう。我々は人々の称賛が欲しいわけでも、非難に怯えているわけでもない。ただ神の御意に召すことのみを冀っているのであって、人々の脅しなど全く恐れてはいないのだ。なぜならば、「神は人々におもねろうとした者らの骨を撒き散らした[6]」〔詩編52:6（53:6）〕からであり、また使徒（パウロ）によれば、この種の者らは「キリストの僕たり得ない」〔ガラテヤ1:10〕からである。

序文終わり

訳　注

（1）　Archivum Hebraeorum という語は、「正典（ヘブライ人の集成）」というほどの意味で用いられる場合もあるが、「図書館」という意味もある。S. Krauss, “The Jews in the Works of the Church Fathers,” *Jewish Quarterly Review* 6 (1894): 232. しかし、G. Stemberger は、ここでは単にヒエロニュムスはエステル記を原典から訳したという旨を述べているに過ぎないと述べる。G. Stemberger,

“Hieronymus und die Juden seiner Zeit,” in *Begegnungen zwischen Christentum und Judentum in Antike und Mittelalter: Festschrift für Heinz Schreckenberg*, ed. D.-A. Koch and H. Lichtenberger (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1993): 359.

（2）「より簡潔に」（pressius）は、あるいは「圧縮して」ともいえる。LXX エステル記にはヘブライ語原典に対して付加された部分（107文）があり、ケンブリッジ版 LXX では、F. J. A. Hort によってその部分は A － F 章として区別されている（モルデカイの夢、エステルの祈り等）。ヒエロニュムスはこの付加部分をいわば「圧縮」して、ヘブライ語原典通りのラテン語訳を作ったのである。ウルガータ聖書では付加部分は、オベルス記号を付されて最後にまとめて収録されている。H. B. Swete, *An Introduction to the Old Testament in Greek* (Cambridge University Press, 1902): 257-59参照。

（3）「普及版」とは LXX、あるいは古ラテン語訳のこと。詳しくは、石川立・加藤哲平「ヒエロニュムス「ウルガータ聖書序文」翻訳と注解（3）」『基督教研究』72巻2号（2010年）51頁、特に注（3）を参照。

（4）修辞学の教室などで、架空の状況を設定して行われていた演説の実演練習（declamatio）を指しているものと思われる（島田誠『古代ローマの市民社会』、山川出版社、1997年、71頁）。エステル記の場合でいえば、たとえばハマンによるユダヤ人殲滅を食い止めるためにエステルが王に直訴しに行く場面で、ヘブライ語ではその間の心理描写がまったくなされていないのに対し、LXX では「エステルの祈り」を挿入することで、いかにもエステルが考えていそうなことを補っている。

（6）ここでの引用は「ガリア詩篇」からのもの。ヘブライ語原典を底本とした「ヘブライ語詩篇」はすでに訳了しているが、これはそれと異なり、LXX を底本とした訳である。詳しくは、石川・加藤「翻訳と注解（1）」『基督教研究』71巻2号（2009年）143-48頁を参照。

ヨシュア記の序文

解　題

ヒエロニュムスはまず、モーセ五書の翻訳が終わったこと、そしてあとはヨシュア記、士師記、ルツ記、エステル記の翻訳が残っていることを述べている。そして例によって、自分がヘブライ語を原典とした翻訳を続けているのは、LXX や古ラテン語

訳を非難するためではなく（むしろ「気に入っていないわけではない」とすら述べている）、自分の新しい版があれば、高価なヘクサプラを手に入れないでも、疑問に思った聖書の一節について読者が自分で調べることができるという利点があるのだと説明する。また自身を非難してくる人物を「サソリ」（scorpius）と表現し、そうした者たちの聖書本文に対する首尾一貫しない態度を批判している。本序文の中で非常に重要な記述としては、パウラの死についての証言と、ウルガータ聖書完成後に預言書の注解を書く決意をしたことについての証言が挙げられるだろう。実際、ヒエロニュムスはこの後多くの聖書注解書をものすることになる。序文自体は、404年頃にエウストキウムに宛てて書かれた。

翻　訳

ヨシュア記における聖ヒエロニュムスの前文が始まる

あたかも大きな借金でも返したかのように、ようやくモーセ五書（の翻訳）が終わったので、我々は次のものに着手する。まずイォスエ・ベンヌン[(1)]〈Iosue Bennun〉すなわちヌンの子ヨシュアとヘブライ人が呼ぶナウェの子イエス、また彼らがソプティーム[(2)]〈Sopthim〉と呼ぶ士師記、そして彼らが（我々と）同じ名前で言い表すルツ〈Ruth〉とエステル〈Hester〉である[(3)]。我々は読者に、ヘブライ語の名前の森や[(4)]、音節による様々な違いなどを、書いてあるとおりに注意深く守るよう忠告しておきたい。それは我々の骨折りと読者の学びとが無駄にならないようにするためである。そして何よりも、これは私がしばしば証言したことであるが、我が友人どもが中傷してくるように、私が旧版を非難するために新版を作りあげているわけではないことを知っていただきたいのである[(5)]。そうではなく、我々の版を喜んでくれる人々のために、私の言葉の限りを尽くしてこれを提供しているのだ。そうすれば、彼らは（入手するのに）莫大な出費と骨折りが必要なギリシア人の「ヘクサプラ[(6)]」の代わりに、我々の版を手にすることができる。また、古代の巻物を読んで疑いを持った場合、彼らはそれを我々の新版と比較することで、自分たちが求めているものを見つけることもできるだろう。ところが、とりわけラテン人のもとには写本の数ほどに版が存在し、各人は自分の判断で、気付いたことを（勝手に）加えたり削除したりしている始末である。しかし互いに響き合わぬものが真理であることなど絶対にありえないのだ。それゆえに、サソリは弓型の槍をもって我々に向かってくることをやめ、聖なる仕事を毒入りの言葉で引き裂くのを思いとどまるべきである[(7)]。彼奴は（私の翻訳を）気に入れば受け入れ、気に入らなければ誹謗してくる。次の一節をよく覚えておくがいい。「お前の口は悪意に溢れ、お前の舌は欺瞞を引き起こした。お前は兄弟に

逆らって座して語り、お前の母の子に逆らって躓きを置いた。これらのことをお前は為したが、私は黙していた。私がお前に似ているとお前は考えたが、それは間違いだ。私はお前を訴え、お前の面前で裁くだろう[8]」〔詩篇49:19-21（50:19-21）〕。いったい次のようなことを聞いたところで、どんな益があるだろうか。すなわち、我々は労苦に励み、他の者らは中傷に精出していること、そしてユダヤ人どもはキリスト者を濫訴し嘲笑う機会を奪われて嘆き、教会の者たちは敵対者が苦しんでいるのを見下し、それどころか罵りさえしていることなどを。ところでもし連中が古い訳――それは私の気に入っていないわけではない――だけを気に入り、しかもそれ以外は何も受け入れるべきではないと考えているならば、なぜアステリスクスとオベルスをもって付け加えられたり刈り込まれたりしたものを読むこともあれば、読まないこともあるのだろうか[9]。またなぜ諸教会はテオドティオン訳のダニエル書を受け入れたのだろうか[10]。そしてなぜ彼らはすべての版を同様に論じながら、オリゲネスや、パンフィロスのエウセビオス[11]（だけ）を崇敬するのだろうか。真実を語ったのちに誤ったことを述べるとは何と愚かしいことか。連中は、新約聖書の中にはなぜ古い書物（セプトゥアギンタ）にない典拠が付け加えられているのかを証明してみせることができただろうか[12]。我々がこうしたことを言うのは、濫訴してくる者たちに対してただ沈黙するばかりだと思われないようにするためである。そのうえ我々は、高潔さの模範となる生涯を送った聖パウラの眠りののち[13]、またキリストの乙女たるエウストキウムよ、私が（あなたに）禁ずることのできなかったこれらの書物ののちに、「息がこの手足を動かす限り[14]」、預言者たちの解説に専心することを決意した[15]。すなわち、（パウラの死の痛みから）恢復したので、永い間放り出していた仕事に再び取りかかることを決意したのだ。それはとりわけ、称賛すべき聖者パンマキウスが[16]、まさにこの同じ仕事を手紙でしつこく要求してくるからである。我々としては、死を招くセイレーンの歌に耳をふさいでやり過ごし、祖国へと急がねばならないだろう[17]。

序文終わり

訳　注

（1）　ヨシュア記はLXXでは「イエス」（Ἰησοῦς）と題されているが、ヘブライ語では「イェホシュア（・ビン・ヌン）」（יְהוֹשֻׁעַ בִּן נוּן）と呼ばれる。

（2）　士師記はLXXでは「士師」（Κριταί）と題されているが、ヘブライ語では「ショフティーム」（שׁוֹפְטִים）と呼ばれる。

（3）　ルツ記、エステル記は、LXXでもヘブライ語でも同様に、「ルツ」（Ῥούθ / רוּת）、

「エステル」（Ἐσθήρ / אֶסְתֵּר）と呼ばれる。

(4)　「ヘブライ語の名前の森」（silva hebraicorum nominum）。ヘブライ語を解さないラテン語読者は、聖書がラテン語訳されていても、耳慣れないヘブライ語の人名が出てくると、単語が分かち書きされていない写本の場合、読むのに苦労したと思われる。そこでヒエロニュムスは「歴代誌の序文」（こちらにも「名前の森」という表現が出てくる）において、写本を写す際にはそうしたヘブライ語を「行のコロンによって分け」て書くように指示している。石川・加藤「翻訳と注解（3）」58-64頁、特に注（16）を参照。

(5)　「我が友人ども」とは中傷者たちのことをあえてそう呼んでいる。また「旧版」とはLXXあるいは古ラテン語訳、「新版」とはウルガータ訳のことを指している。

(6)　εξαπλοις. ヘクサプラ（六欄聖書）は聖書の同一箇所について、ヘブライ語原文、ギリシア文字転写、四つのギリシア語訳を平行に並べたものであることから、極めて大部の書物であったことが予想される。一説では15巻6000頁を要したというから、当然普通の人が手に入れられるような代物ではなかったことは想像に難くない。K. H. Jobes / M. Silva, *Invitation to the Septuagint* (Michigan: Baker Academic, 2005): 51参照。

(7)　「サソリ」（scorpius）は単数形であることから、ヒエロニュムスは中傷者一般ではなく特定の個人を指している。おそらくは仇敵ルフィヌスのことだと考えられる。S. Rebenich, *Jerome* (London & NewYork: Routledge, 2002): 49.

(8)　ここでの引用は「ガリア詩篇」からのもの。詳しくは、石川・加藤「翻訳と注解（1）」143-48頁を参照。

(9)　アステリスクス記号とは、ヘブライ語原文に対し、LXXでは訳し落とされている箇所。オベルス記号とは、ヘブライ語原文に対し、LXXでは付加されている箇所。詳しくは、石川・加藤「翻訳と注解（1）」144-45頁を参照。

(10)　ギリシア語聖書におけるダニエル書は、ヒエロニュムス当時、LXXではなくテオドティオン訳が普及していた。詳しくは、石川・加藤「翻訳と注解（1）」155-61頁の「ダニエル書の序文」を参照。

(11)「パンフィロスのエウセビオス」とは、エウセビオスの異名。パンフィロス（『著名者列伝』75）はエウセビオスの師で、放置されたままだったオリゲネスの図書館を管理していた。エウセビオスは師を慕い、しばしばこの名を名乗っていた。

(12)　新約聖書の中で引用される旧約の文言の中には、引用元である「古い書物」、すなわちLXXと一致しないものがある。ではなぜ新約の引用とLXXとが一致しないかというと、福音書記者やパウロはヘブライ語原典から引用しているか

らだとヒエロニュムスは考えた。こうしたことをヒエロニュムスは、「ヘブライ語の真理」（Hebraica Veritas）という語で表している。その証拠として、彼は *Ep*.57、「エズラ記の序文」、「歴代誌の序文」、「五書の序文」などで5つの例を挙げている。詳しくは、石川・加藤「翻訳と注解（3）」49-71頁の各序文を参照。

（13）ローマ時代からベツレヘム移住後にかけて、ずっとヒエロニュムスのよきパートナーだったパウラが亡くなったのは、404年1月26日のこととされている（F. Cavallera, *Saint Jérôme: Sa vie et son œuvre* (Louvain & Paris, 1922) II: 162）。ここから、本序文が少なくともそれ以降に書かれたものだと分かる。パウラの死については、エウストキウム宛て *Ep*.108に詳しい。「これほどの方を失ったことを我々は嘆くのではなく、我々が彼女を得ていたこと、それどころか今もなお得ていることに感謝しなくてはなりません。なぜなら、神のもとにはすべての者たちが生きており、主のもとに帰った者は誰でも、その家族の一員となるからです。確かに我々は彼女を失いましたが、彼女は天の家を住みかとするのです」（108.1）。

（14）ウェルギリウス『アエネーイス』IV.336。

（15）実際ヒエロニュムスはパウラの死後、つまり404年以降、預言書の注解書を数多くものしている。406年には『ゼカリヤ書注解』『マラキ書注解』『ホセア書注解』『ヨエル書注解』『アモス書注解』、407年には『ダニエル書注解』、408-409年には『イザヤ書注解』、410-414年には『エゼキエル書注解』、414-16年には『エレミヤ書注解』（未完）が発表された。

（16）パンマキウスはローマ遊学時代からの古い友人。ヌミディア出身の貴族で、財政的にも精神的にも常にヒエロニュムスを支えていた。*Ep*.48, 49, 57, 66, 84, 97の名宛て人である。ここでヒエロニュムスが述べている、パンマキウスが要求していた「永い間放り出していた仕事」とは、『ホセア書注解』『ヨエル書注解』『アモス書注解』が彼に捧げられていることから、これらの注解のことだったと思われる。パンマキウス自身は410年に没した。

（17）ホメロス『オデュッセイア』第12歌を念頭に置いていると思われる。

トビト記とユディト記の序文

解　題

ヒエロニュムスはトビト記やユディト記の翻訳が自発的なものでなく、あくまで名

宛て人の友人たちの依頼によって仕方なくやったことだと弁明している。なぜそれほどまでに彼がこれらの書物の翻訳を渋ったのかというと、ひとえにユダヤ人の聖書の中で正典として数えられていないためであった。それを説明するのに、彼はトビト記もユディト記もユダヤ人の正典意識で言えば「外典」、すなわち「アギオグラファ」の中に配されると述べているが、「列王記の序文」ではこの語を「諸書（ケトゥビーム）」の意で用いており、「外典」には「アポクリファ」の語を当てている。今回の二つの序文では少々用語が混乱しているといえる。またヒエロニュムスはトビト記を訳すのに底本としてアラム語を用いたが、自身はアラム語に習熟していなかったため、アラム語とヘブライ語を両方解する者に一旦ヘブライ語に訳してもらった上で、今度はヒエロニュムスがそれを聞き取ってその場でラテン語に訳したと述べている。これが本当ならば、彼のヘブライ語能力は読解だけに留まるものではなく、ある程度の聞き取りができたことになる。「トビト記の序文」は、398-407年の間にクロマティウスとヘリオドルスに宛てて書かれたと考えられている。407年にヘリオドルスが没しているので、terminus ad quem は確実である[2]。「ユディト記の序文」の年代は不明だが、内容から鑑みるに、おそらく「トビト記の序文」と同時期のものと思われる[3]。

翻　訳

トビト記の序文が始まる

司教クロマティウス君とヘリオドルス君に、ヒエロニュムスが主において挨拶を送る。

あなたがたの要求の執拗さには驚かざるを得ない。というのもあなたがたは私に、カルデア語で書かれた書物をラテン語の文章に翻訳するように要求しているのである。それはとりわけトビト書についてなのだが、ヘブライ人はその書を聖なる書物の一覧から外し、彼らがアギオグラファ[(1)]〈Agiografa〉と呼ぶ書物群に入れている。この翻訳を私がしたのは、（ひとえに）あなたがたの要求のゆえであって、私の関心によるわけではない。ヘブライ人たちの関心は我々を反駁することであり、彼らは自分たちの正典〈canon〉に逆らってそれら（アギオグラファ）をラテン人の耳に伝えた罪を我々に帰している。しかし私はパリサイ人どもがよしとしないものや、司教らの命に従うことの方がより望ましいと判断して[(2)]、可能な限り努力したのである。カルデア人の言語はヘブライ語に近いので、私は両方の言語に極めて精通した話者を見つけて、一日仕事に取り掛かった。彼が私にヘブライ語で表現したことを、私の方で速記者を呼び寄せておいて、ラテン語で私が口述したのである[(3)]。

私はあなたがたの祈りをもって、この仕事の報酬としておこうと思う。なぜなら、

あなたがたが有り難くも要求してくれたことを自分が果たせたのは、あなたがたのおかげだと私は知ることになるだろうからである[(4)]。

序文終わり

訳　注

（1）　ヒエロニュムスは本序文の中では、「アギオグラファ／ハギオグラファ」（Agiografa）の語を「外典」の意で用いているが（ユディト記の序文も同様）、「列王記の序文」の中では「諸書（ケトゥビーム）」の意で用いており、「外典」を表すには「アポクリファ」（apocrifa）という語を用いている。「列王記の序文」については、石川・加藤「翻訳と注解（1）」148-55頁を参照。

（2）　「ソロモンの書の序文」によると、ヒエロニュムスはクロマティウスとヘリオドルスに金銭的に援助してもらっていた（石川・加藤「翻訳と注解（3）」49-53頁を参照）。気が進まないながら、彼がトビト記とユディト記の翻訳を引き受けたのには、そうした理由もあったと思われる。

（3）　ヒエロニュムスはここで、トビト記を訳すためにアラム語を底本としたと述べている。しかし永い間トビト記にはギリシア語訳しか現存していなかった。加えてギリシア語訳とウルガータ訳とを比べると後者の方が短く、一方でギリシア語訳には存在しない文言も付け加えられていることなどから、ヒエロニュムスの証言の信憑性は低いとされていたが、1952年にクムランの第4洞窟からトビト記のアラム語とヘブライ語断片が発見された。しかしこの断片は、ウルガータ訳よりも、むしろギリシア語訳との親近性を示しており、今もってヒエロニュムスの底本としたアラム語の Vorlage をめぐる議論が続いている。V. T. M. Skemp, *The Vulgate of Tobit compared with Other Ancient Witnesses* (Atlanta: Society of Biblical literature, 2000): 19を参照。また本序文からも明らかなように、ヒエロニュムスはアラム語に不得手であった。これは彼自身も「ダニエル書の序文」で認めていることである（石川・加藤「翻訳と注解（1）」155-60頁）。

（4）　cum 節の動詞 didicero は未来完了形なので、この序文を書いている時点で翻訳は完成していないか、あるいは完成していてもまだ友人の評価を聞いていないということが分かる。

翻　訳

ユディト記の序文が始まる

ヘブライ人のもとでは、ユディト記はアギオグラファ[1]〈Agiografa〉の中にあるものとして読まれており、この書の権威は、論争になっている事柄を確固たるものとするためにはあまりふさわしくないと判断されている。一方で、本書はカルデア語で書かれており、歴史物語にも数えられている。しかしニカイア公会議で本書が聖書（正典）の中に入れられたことが知れ渡っているので[2]、私はあなたがたの要求、というよりも強要に（渋々）同意した。私はひどく根を詰めていた仕事を擲って一晩夜なべをし、言葉から言葉へというより意味から意味へと翻訳したのである[3]。多くの写本の相違は不適切なものとして刈り取った。そしてカルデア語の言葉の中にただ完全な理解をもって見出し得たことのみをラテン語で表現した。

寡婦ユディトを、純潔の模範として受け入れてくれたまえ。そして、高らかな賛美をもって、また不断の称賛をもって、彼女を顕彰してくれたまえ。というのも、彼女の純潔に報いる方、すなわち誰も打ち負かせないものを打ち負かし、征服し難いことを征服する力を彼女に与えた方が、彼女を女性のみならず男性の模範ともしたからである。

序文終わり

訳　注

(1)　「アギオグラファ」という言葉の使い方については、「トビト記の序文」の注(1)を参照のこと。

(2)　ニカイア公会議はキリスト教史上最初の公会議で、コンスタンティヌス帝の召集で325年5月20日に開かれた。主な議題はアレイオス派の思想に関するものだったことが知られているが、ユディト記についての議論があったという証言はヒエロニュムスによるこの箇所以外にはない。J. N. D. Kelly, *Jerome: His Life, Writings, and Controversies* (London: Duckworth, 1975): 285を参照。ニカイア公会議については、A・H・M・ジョーンズ（戸田聡訳）『ヨーロッパの改宗：コンスタンティヌス《大帝》の生涯』（教文館、2008年）154-71頁を参照。

(3)　*Ep*.57.5においてヒエロニュムスは、普通の書物を翻訳する場合は「意訳（意味から意味へ）」で十分だが、聖書に関しては「言葉の順序すらも神秘である」がゆえに、「逐語訳（言葉から言葉へ）」をするべきだと述べている。本序文では「意味から意味へ」を優先させていることから、彼がユディト記を聖書文書

のひとつとしては考えてなかったことが看取される。

福音書の前文

解　題

ヒエロニュムスは聖書の翻訳・改訂を三回行っており、まず一回目としては、384年頃に教皇ダマスス1世の命を受け、ローマにおいて古ラテン語訳の福音書と詩篇（ローマ詩篇）の改訂を行った。二回目は、386年にベツレヘムにおいて、詩篇（ガリア詩篇）、ヨブ記、ソロモンの書、歴代誌を、ヘクサプラに含まれるLXX（ギリシア語）からラテン語訳した。三回目は、392-405年にかけて、すべての旧約文書をヘブライ語からラテン語訳した。つまり彼は新約聖書については一回目に福音書の改訂をしたのみである。本前文はその改訂時のものであるため、おそらく全序文のうちで最初に書かれたものと考えられる。この中でヒエロニュムスは、福音書の改訂作業が名宛て人であるダマスス1世その人による依頼であったことを確認し、ラテン語の写本の混乱は「ギリシア語の真理」（Graeca Veritas）によって正されるべきだと主張している。また福音書の構成について説明したあと、古ラテン語訳の写本が福音書間の記事の違いをこれまで恣意的に統一させようとしてきたのを批判し、自分は今回ギリシア語を参照しながら原テクストを復元することに努めたので、エウセビオスの対観表を見ながらその改訂版を読めば、四福音書の「同じ内容、似た内容、単独の内容」を知ることができると言明する。そして最後には対観表の使用法について解説している。前文自体は、383-84年頃に教皇ダマスス1世に宛てて書かれた[4]。

翻　訳

福音書における司祭聖ヒエロニュムスの前文が始まる

祝福されたる教皇ダマスス猊下にヒエロニュムスがご挨拶申し上げます。

猊下は私に、古いものから新しい仕事をなすようにとの仰せです。すなわち、聖書（古ラテン語訳）の写本が全世界に散らばってしまったあとで、私があたかも何らかの審判者として（裁きの）座にすわり、それらが互いに異なっていることをうけて、いったいどれがギリシア語の真理[(1)]〈graeca veritas〉と一致するものなのかを判別するという仕事のことです。これは尊い仕事ではありますが、（間違いを犯す）危険な推測をするということでもあります。言うなればそれは、すべての人々から裁かれるべき者（私自身）が他の者らを裁き、古人の言葉を修正し、古びた道具を幼い頃のは

じめに戻すことに他なりません。たとえば、学があろうとなかろうと、ある者が巻物を手に入れて、一度飲み込んだ唾と（今度）読むものとが一致しないのを見たときに[2]、私のことを偽造者にして聖物窃盗者――恐れ多くも古い書物に何かを付加し、変更し、修正を加えた不届き者――と、声に出して叫ばぬ者がはたしているでしょうか。しかし、そうした悪意に対して、二つの理由が私を慰めてくれます。すなわち、猊下のような最も高位にある司祭がそうするようにとお命じになっていること、そして様々に異なるものなど真理ではないということが中傷者どもの証言によっても認められていることです。もしラテン語の諸写本に信頼が置かれるべきだと言うのなら、彼らはどの写本（に信頼を置くべき）かを答えなければならないはずです。（さもなくば）ほとんど写本の数だけ信頼の数もあるということになってしまいます。しかしもし多くのものから（ひとつの）真理が求められるべきであるとすれば、我々はギリシア語のオリジナルに戻り、堕落した翻訳者どもによって悪い方に編集され、あるいは無知で不遜な者どもによって誤った方へ修復され、あるいは眠りこけた写字生どもによって付加されたり変更されたりしたものを正さないでよいわけがありましょうか[3]。とはいえ、私は旧約聖書について論じているわけではありません。というのも、それは70人の長老たちによってギリシア語に翻訳されたあと、三段階[4]を経てから我々のもとに届いたものだからです。アクィラやシュンマコスが何を考えていたのか、またなぜテオドティオンが彼ら新旧（の翻訳者たち）のちょうど中間を歩んだのかは問いません[5]。使徒たちが認めたかの翻訳（セプトゥアギンタ）こそが真正なのでしょう。ここでは新約聖書について申し上げます。これはギリシア語（で書かれたもの）であることは疑いありません。ただし使徒マタイは別です。彼は最初にキリストの福音をユダの地においてヘブライ語で公にしたからです[6]。新約聖書は確かに我々の言語では（写本によって）いろいろ異なっておりますが、ひとつのものが多くの小川の流れを導くのですから、源泉について尋ね求められなければならないのです。ルキアノスとヘシュキオスが名付け、わずかな人々が邪悪な意図で擁護している写本には言及しないでおきましょう[7]。彼らにとってみれば、旧約聖書においてはセプトゥアギンタの翻訳者たちのあとに修正することは何も許されず、また新約聖書においては修正することは何の役にも立たないのですから。（彼らによれば）以前に多くの民族の言語で訳された聖書をみれば、付加されたものは誤っているということが分かる、というわけです。

それゆえに、目下のこの小さな前文では、福音書として四書のみを確言いたします。その順番は、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネとなっており[8]、古いギリシア語の諸写本を校合して校訂されています。それらがラテン語の読みの慣用法から甚だしく異なることのないように、我々はペンを制御して、意味が変わっているように思われ

るところだけを訂正し、残りはそのままにしておきました。

カイサリアの司教エウセビオスがアレクサンドリアのアンモニオスに従って並べた10の対観表も、ギリシア語にあるとおりに我々は表しました[9]。もし誰かが熱心にも、福音書において同じ内容、似た内容、あるいは単独の内容の箇所を知りたければ、それらの区分から知ることができるのです。もし本当に現在我々が持っている諸写本の中で誤りが大きくなっているとすれば、それは次のような場合です。すなわち、同一の事柄についてある福音書記者が多目に語っていることを、（我々の写本が）別の福音書ではそれが足りないと考えて付け加えた場合です。あるいは、同じ意味が福音書によって別様に表現されている場合、四福音書のうちどれかひとつを最初に読んだ者がその先例に合わせて残りのものも改訂されるべきものと見なすこともあったでしょう。このことから、我々のもとではすべてが混同しており、マルコにおいてはルカとマタイの多くのことが、逆にマタイにおいてはヨハネとマルコの多くのことが、そして他の文書（ルカ、ヨハネ）においてはそれ以外の書（マルコ、マタイ）に特有である残り部分の多くのことが見つかるという事態が生じています[10]。それゆえに、以下に挙げる対観表を一読されれば、混同の誤りは取り除かれ、猊下はすべての類似の箇所を知り、またそれぞれの文書独自の箇所を元通りにすることができるでしょう。第一の表では、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四者が一致しています。第二の表では、マタイ、マルコ、ルカの三者が一致しています。第三の表では、マタイ、ルカ、ヨハネの三者が一致しています。第四の表では、マタイ、マルコ、ヨハネの三者が一致しています。第五の表では、マタイ、ルカの二者が一致しています。第六の表では、マタイ、マルコの二者が一致しています。第七の表では、マタイ、ヨハネの二者が一致しています。第八の表では、ルカ、マルコの二者が一致しています。第九の表では、ルカ、ヨハネの二者が一致しています。第十の表では、他の文書にはないそれぞれ特有の箇所を表しています[11]。それぞれの福音書で異なった数字が、Iから始まって書物の最後まで増えていくのです。この数字は黒色で記され、その下には別に朱色で書かれた数字があります。下の数字はXまで達するようになっており、上の数字がどの表の中に求められるべきかを示しているのです。それゆえに、本を開いて、たとえばこれこれの章がどの対観表にあるのかを知りたいときには、下の数字から直ちにそれを知ることができるでしょう。次に、表が（数字の）かたまりとして区別されている（本の）最初のところに戻ると、上に書かれた表題からすぐに同じ対観表が見つかり、（その中に）猊下が探しておられる福音書記者――その名前自体も題に記されております――と同じ数字を見出すことができるでしょう。さらに、（見つけた数字の）隣にある他の福音書記者の縦列の欄をご覧になれば、どの数字が真横にあるかにお気づきになるでしょう。そしてそれを知ったら、それぞれの巻に戻り、

該当番号を見つけ出すことで、すぐさま同じ内容や類似した内容が述べられている箇所をも見つけることができるでしょう[12]。

願わくは、猊下がキリストにおいてご健勝ならんことを、また私が猊下の御心に留まらんことを。最も祝福されたる教皇猊下へ。

序文終わり

訳　注

(1)　ヒエロニュムスは後年、旧約聖書に関して「ヘブライ語の真理」(Hebraica Veritas) を標榜しており、古ラテン語訳とヘブライ語原典とが一致しない場合、ヘブライ語が優先されるべきだと主張することになるが、本序文からは、新約聖書に関しても同様に「ギリシア語の真理」(Graeca Veritas) こそが優先されるべきだと考えていたことが看取される。

(2)　「一度飲み込んだ唾」とは、読者が慣れ親しんでいる古ラテン語訳のこと。読み慣れた本文とヒエロニュムスによる改訂を経た本文とが食い違う場合、読者は必ず自分を責めるだろうと述べている。

(3)　ここでヒエロニュムスは聖書本文の乱れが生じる原因として、「翻訳者」、「不遜な者」、「写字生」らによる意識的・無意識的な改竄を挙げている。中でも写字生の引き起こすさまざまな誤りのタイプについては、B・M・メツガー（橋本滋男訳）『新約聖書の本文研究』（日本基督教団出版局、1999年）192-210頁、またはL・D・レイノルズ／N・G・ウィルソン（西村賀子、吉武純夫訳）『古典の継承者たち：ギリシア語・ラテン語テクストの伝承にみる文化史』（国文社、1996年）328-54頁を参照。

(4)　「三段階」とは、すぐあとで述べているアクィラ、シュンマコス、テオドティオンの訳のことか。あるいは、旧約聖書が「我々（ラテン人）」のもとに届くまでは、ヘブライ語→ LXX →古ラテン語訳と「三段階」を経なければならないということか。A. Kamesar は後者として説明している。A. Kamesar, *Jerome, Greek Scholarship, and the Hebrew Bible: A Study of the Quaestiones Hebraicae in Genesim* (Oxford: Clarendon Press, 1993): 45.

(5)　ヒエロニュムスは「ヨブ記の序文」で三者の翻訳方針について次のように述べている。「アクィラ、シュンマコス、テオドティオンが、言葉から言葉を、意味から意味を、あるいはその両者を混ぜ合わせて、適度に両方用いる……」（石川・加藤「翻訳と注解（2）」『基督教研究』72巻1号（2010年）52頁）。ここでも本序文と同様に、テオドティオンは、翻訳の精度に関してアクィラとシュ

ンマコスのちょうど中間に位置する者として説明されている。

(6) ヒエロニュムスはしばしばマタイ福音書の原典がヘブライ語だったという説明をしている（『ホセア書注解』III.xi.1,2、『イザヤ書注解』III.vi.9など）。しかし現在ではこの説は退けられており、ヒエロニュムスが言及しているのは『ナザレ人福音書』のことだと考えられている。『ナザレ人福音書』はアラム語かシリア語で書かれたもので、マタイ福音書と関連した内容を持っていた。ヒエロニュムスより以前にも、エウセビオスやエピファニオスらが言及している。Kelly, *Jerome*, 65お よ び、T. C. G. Thornton, "Jerome and the 'Hebrew Gospel according to Matthew'," *Studia Patristica* 28 (1991): 118-22を参照。

(7) 「歴代誌の序文」によると、LXXには、オリゲネス、ヘシュキオス、ルキアノスのそれぞれによる三様の改訂版が存在する（石川・加藤「翻訳と注解（3）」59-64頁）。本序文ではオリゲネスについての言及がないが、この時点でのヒエロニュムスはオリゲネスの改訂版のみを肯定的に捉えていたということか。

(8) 福音書の並び順がマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの順に定まったのは3世紀のオリゲネス、エウセビオスの頃のこと。それ以後も古ラテン語訳の写本では、伝統的にマタイ、ヨハネ、ルカ、マルコの順に並べられていたが、ヒエロニュムスはギリシア語写本に倣って現在の順番を採用していた。H. F. D. Sparks, "Jerome as Biblical Scholar," in *The Cambridge History of The Bible*, vol.1, ed. P. R. Ackroyd and C. F. Evans (Cambridge: Cambridge University Press, 1970): 529. またここでヒエロニュムスは「古いギリシア語の諸写本（codex）」という語を用いているが、重要な記述である。というのも、そもそも並び順が問題になるのは、福音書が一冊の「冊子（codex）」の形態を取るようになってからのことで、それ以前に一書ずつ別の「巻物（volumen）」に書かれていたときには並び順を決める必要はなかった。以上のことについては、田川建三『書物としての新約聖書』（勁草書房、1997年）99-108頁を参照。

(9) エウセビオスの対観表（Canones）は、ギリシア語原典はもとより、ラテン語、シリア語、コプト語、ゴート語、アルメニア語などの多くの福音書写本の巻頭に置かれていた。対観表については、戸田聡「『エウセビオスのカノン』に見る福音書理解」『聖書学論集』43号（2011年）97-117頁、メッガー（橋本滋男訳）『新約聖書の本文研究』44-46頁を参照。エウセビオスがカルピアノスに宛てた書簡の原文は、Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, 27. revidierte Auflage (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1993): 84*-85*、同書簡の邦訳は、橋本滋男・津村春英訳『ネストレ＝アーラント：ギリシア語新約聖書（第27版）・序文』（日本聖書協会、1995年）57-58頁に収録されている。

（10）ヒエロニュムスはここで、古ラテン語訳の写本では、四福音書間の記事の違いをこれまで恣意的に統一させようとしてきたことを批判している。しかし自身の改訂版はギリシア語の原典を参照しながら作成したものなので、エウセビオスの対観表を用いて、それぞれの「同じ内容、似た内容、あるいは単独の内容」を知ることができると説明している。

（11）順列組み合わせのうち、マルコ－ルカ－ヨハネ、マルコ－ヨハネの表が欠けている。

（12）たとえば、マタイ3:3「これは預言者イザヤによってこう言われている人である。『荒野で叫ぶ者の声がする。《主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ》』」という箇所には、VIII / I という分数が書かれている。この分数のうち、朱色のインクで書かれた分母は表の番号を、黒色で書かれた分子はその表に記された「章」（capitulum）の番号を表している。つまり VIII / I の場合、表 I のマタイの VIII という数字を探せばいいことになる。

INCIPIT CANON I IN QUO QUATTUOR

MATTH.	MARC.	LUC.	IOH.
VIII	II	VII	X

表を見ると、マタイの VIII の平行箇所は、マルコの II / I、ルカの VII / I、ヨハネの X / I だということが分かる。そして本文を見ると、これらはそれぞれ、マルコ1:3、ルカ3:3-6、ヨハネ1:23に当たる箇所であることが分かるようになっている。

パウロ書簡の序文

解　題

ヒエロニュムスは新約聖書に関して、福音書以外の文書の改訂をしておらず、本序文もヒエロニュムスの手になるものではない[5]。これは文体からも明らかに見て取ることができる[6]。著者は本序文の中で、パウロ書簡について、第一にその執筆理由、第二にそれが10書で構成されている理由を説明している。第一の理由については、パウロは生まれたばかりの教会の統制を図るために書簡を書いたとし、第二の理由については、パウロはモーセの十戒にあやかって書簡も10書にしたのだと説明する。続いて、パウロ書簡にヘブライ書が含まれることに反対する者たちが、ヘブライ書にはパウロの名が冠されていないことを理由としているのに対し、著者は、パウロの名がな

いからといってただちにパウロの筆によるものではないとはいえず、しかも当時の状況を鑑みれば、反感を買っていたパウロは名を隠す必要があったのだと反論する。最後に、パウロ書簡の並び順について、明らかに最初に書かれたものではないローマ書が筆頭に来ているのは、ローマ人の信仰が最も未熟だったからであり、パウロ書簡は信仰の成熟度合いの順に並んでいるのだと説明する。すなわち、最後のヘブライ人が最上のものとなるように、漸次信仰の成熟度が増していくのである。本序文の著者、年代等は不明である。

翻　訳

使徒パウロの書簡における序文が始まる

最初に問われるのは、福音書のあとに――律法を補完するものであり、またその中には我々にとって、生きることの模範や規則が十分に開陳されている福音書のあとに、なぜ使徒（パウロ）はこれらの書簡を個々の教会宛に記そうとしたのかということである[(1)]。それは次のような理由によってそうなったと考えられる。すなわち、明らかに、生まれたばかりの教会の基礎を固め、新たに起こっていた問題についてあらかじめ備えるためである。その結果、現在ある誤りや持ち上がってきた誤りを刈り取り、そのあとに起こり得る問題をも締め出すことができたのだ。彼はその際預言者たちを手本にした。預言者たちは、神のすべての規定が集められたモーセの律法が発布されたあと、それにもかかわらず、自らが更新した教えによって常に人々の罪を妨げ、またその罪を具体例として示すために書物（にすること）によって我々の記憶にも移したのである。第二に問われるのは、なぜ彼（パウロ）は教会に宛てて10の書簡しか書かなかったのかということである。10書には、「ヘブライ人たちへ」と言われているかの書簡も含まれる。残りの4書は特に弟子たちに捧げられている[(2)]。彼は、新約聖書が旧約聖書と矛盾しておらず、自分もモーセの律法に反していないことを示すために、最初に命じられた十戒の数に自らの書簡を揃えたのである。また、モーセは民がファラオから自由にされる際に、教訓をもって彼らを諭したわけだが、その教訓と同じ数（10）の書簡によって、パウロも人々が悪魔と偶像崇拝の虜から取り上げられる際に、彼らを徹底的に教えたのである。むろん、きわめて教養ある者たちは、（モーセの）2枚の石板も（旧新約）2つの契約の予型であったと伝えている。

確かにある者たちは、ヘブライ人に向けて書かれた手紙はパウロのものではないと主張している[(3)]。というのも、この手紙には彼の名前が冠されておらず、言い回しや文体にも相違があるためである。しかしそれは、テルトゥッリアヌスによればバルナバの手になるものであるというし[(4)]、ある者たちによればルカの手になるもの、ある

いはまた使徒たちの弟子であり、かつ使徒たちのあとに叙階されたローマ教会の司教であるクレメンスの手になるものであるという[5]。こういう者たちに対しては、次のように答えるべきであろう。すなわち、パウロの名前がないためにパウロの手になるものではないとすれば、誰の名前も冠されていないならば誰の手によるものでもないことになってしまうだろう、と。こうしたことが馬鹿げているというなら、むしろこれほどまでに雄弁な彼の教えによって輝きを放っているような書簡は、彼自身の手になるものと信じられるべきである。しかしヘブライ人たちの教会においては、彼はあたかも律法の破壊者であるかのように誤って疑われているため、彼は名前を隠し、律法の諸型とキリストの真理について説明しようとしたのである。それは、前面に出された彼の名に対して憎しみが生じ、読書の効果が妨げられることのないようにするためであった。もし他の手紙が書かれた（パウロにとって）外国の言語であるギリシア語よりも、彼自身の言語であるヘブライ語による方がもっと雄弁であるように見えるとしても、それはむろん不思議なことではない。

ある者たちは次のようなことに悩んでいる。すなわち、理屈ではローマ人への手紙が最初に書かれたものでないことは明らかなのに、なぜそれが最初に置かれているのかということである。というのも、彼自身、この手紙はエルサレムに向かうときに書いたものだと証言しているが〔ローマ15:25参照〕、それより前に彼はすでにコリント人やその他の者たちに対し、自分が（エルサレムに）運ぶことになる献金を集めておくようにと手紙で励ましていたからである[6]〔二コリ9:1,12参照〕。それゆえに、ある者たちは、すべての手紙は次のように並べられていると理解されると主張するのである。すなわち、よりあとに送られた手紙（ローマ書）が最初のものとして置かれているのであり、それはそれぞれの手紙を通して、（信仰が）だんだんと完成していくためであった、と[7]。というのも、ローマ人の大多数は、自分たちが救われているのは神の恵みによってであり、自らの功労のためではないということを知らなかったほどに未熟であった。そしてこのことから、人々は二派に分かれて互いに争うに至っている。それゆえに、パウロは異邦人たちの過ちのことを優先して述べ、彼らは確固たる者にされなければならないと主張しているのである〔ローマ1:11参照〕。ところが、彼はコリント人にはすでに知識の恩恵が与えられていると言っている〔一コリ1:5参照〕。そして彼らの行いすべてを非難するのではなく、彼らがなぜ罪人を非難しなかったのかという点だけを叱責している。彼は次のように言う、「あなたがたの間で密通があると聞いています」〔一コリ5:1〕、しかし「あなたがたは私の霊と一緒になったので、このような者をサタンに引き渡す」〔一コリ5:4-5〕。一方（コリントの）第二の手紙では彼らは称賛されており、ますます前に進むようにと励まされている。ガラテヤ人は、狡猾この上ない偽使徒らに信頼を置いたこと以外は、いかなる罪でも

告発されていない。エフェソ人は、全くもっていかなる非難にも値せず、大きな称賛に値している。なぜなら彼らは使徒的な信仰を保っていたからである。フィリピ人は、さらに大きな称賛を得ている。彼らは偽使徒たちの言うことをまるで聞こうとはしなかったからである。コロサイ人は、彼らが使徒から（離れていて）肉としては見えるところにいなかったときも、次のような称賛に値すると見なされていた。「もし私が肉では離れていても、霊ではあなたがたと共におり、あなたがたの秩序を喜んで見ています」〔コロサイ2:5〕。テサロニケ人もこれに劣らず、二つの手紙の中で大いなる称賛をもって称えられている。彼らは真理に対する揺るぎない信仰を守ってきただけではなく、市民による迫害の中でも確固としていたことが明らかになっていたからである。さらに、ヘブライ人についても何かしら言われるべきであろう。きわめて高く称賛されたテサロニケ人さえもが、彼ら（ヘブライ人）に倣う者となったと言われているのであるから。このことをパウロは次のように述べている、「あなたがた兄弟たちは、ユダヤにある神の教会に倣う者となりました。というのも、彼ら（ヘブライ人）がユダヤ人から受けたのと同じことを、あなたたちもまた同胞から受けたからです」〔一テサ2:14〕。また、ヘブライ人たち自身のもとでも（ヘブライ人への手紙においても）、パウロは同じことを想起させて述べている。「あなたがたは捕らえられた者たちと共に苦しみ、財産の略奪をも喜んで受け入れました。なぜならあなたがたは、自分たちがよりすばらしく、いつまでも残るものを持っていると知っていたからです」〔ヘブライ10:34〕。

序文終わり

訳　注

（1）　本序文の著者は、パウロ書簡よりも福音書の方が先に書かれたと考えているが、近代の新約聖書学では、福音書はパウロ書簡よりもあとに書かれたとされている。

（2）「教会に宛てた10の書簡」とは、ローマ、第一コリント、第二コリント、ガラテヤ、エフェソ、フィリピ、コロサイ、第一テサロニケ、第二テサロニケ、ヘブライのことであり、「（弟子たちに宛てた）残りの4書」とは、第一テモテ、第二テモテ、テトス、フィレモンのことである。本序文では、教会宛ての書簡が10書なのは、パウロがモーセの十戒を範としたからと説明されている。

（3）　ヒエロニュムス『著名者列伝（*De viris illustribus*）』5の「パウロ」の項でも、同様の説明がなされている。おそらく本序文の著者は『著名者列伝』を読んでいたのだろう。T. P. Halton (trans.), *Saint Jerome: On Illustrious Men* (Washington

D.C.: The Catholic University of America Press, 1999): 12-14を参照。

(4)　テルトゥッリアヌス『純潔について（*De pudicitia*）』20.2。

(5)　エウセビオス『教会史』3.38.1-2によると、ヘブライ書は最初パウロによってヘブライ語で書かれたが、それを福音書記者ルカあるいはローマのクレメンス（1世）がギリシア語に翻訳したものと説明されている。秦剛平訳『エウセビオス「教会史」（上）』（講談社学術文庫、2010年）207頁を参照。

(6)　パウロはローマ書をエルサレムに向かう途中で書いたと述べているが、そもそもエルサレム訪問の目的は、各地の教会からエルサレム教会への献金を送るためであり、一方その献金を用意しておくようにという指示が第二コリント書の中にあるのだから、明らかに第二コリント書の方がローマ書よりも先に書かれているはずである。エルサレム教会への献金問題に関しては、J. D. Crossan / J. L. Reed, *In Search of Paul: How Jesus's Apostle Opposed Rome's Empire with God's Kingdom* (NewYork: HarperCollins, 2004): 397-400を参照。

(7)　本序文によれば、パウロ書簡の配列は、名宛て人の信徒たちの信仰の成熟順になっている。以下では、ローマ人を最低として、漸次信仰が完成されていき、最後にヘブライ人が最高のものと説明されている。

注

1　翻訳・監修を石川が、翻訳・解題・訳注を加藤が担当した。今回で「ヒエロニュムス「ウルガータ聖書序文」翻訳と注解」は完結する（全4回）。

2　「トビト書の序文」の英訳と詳しい解説は、V. T. M. Skemp, *The Vulgate of Tobit compared with Other Ancient Witnesses* (Atlanta: Society of Biblical literature, 2000): 15-21を参照。

3　J. N. D. Kelly, *Jerome: His Life, Writings, and Controversies* (London: Duckworth, 1975): 284.

4　一説によれば、ヒエロニュムスと教皇ダマスス1世との往復書簡（*Ep*.19-20, 21, 35-36）は、ヒエロニュムスが西方教会における自分の存在感を高めるために書いた虚構の書簡であると考えられている（P. Nautin, "Hieronymus," in *Theologische Realenzyklopädie* (Berlin and New York: Walter de Gruyter, 1986) XV: 305）。しかし現在ではもう少し穏当な意見が大半を占めている（H. I. Newman, "How Should We Measure Jerome's Hebrew Competence?," in *Jerome of Stridon: His Life, Writings and Legacy*, ed. A. Cain and J. Lössel (Farnham: Ashgate, 2009): 132）。

5　使徒言行録、パウロ書簡、黙示録の改訂は、ルフィヌスあるいはエピファニオスによってなされたという説がある。S. Rebenich, "Jerome: The 'Vir Trilinguis' and the 'Hebraica Veritas'," *Vigiliae Christianae* 47 (1993): 51. またペラギウスという説もある。C. B. Tkacz, "LABOR TAM UTILIS: The Creation of the Vulgate," *Vigiliae Christianae* 50 (1996): 53.

6　H. F. D. Sparks, “Jerome as Biblical Scholar,” in *The Cambridge History of the Bible*, vol.1, ed. P. R. Ackroyd and C. F. Evans (Cambridge: Cambridge University Press, 1970): 519.

＊　本稿は平成23年度科学研究費補助金ならびに日本学術振興会特別研究員研究奨励金による研究成果の一部である（加藤哲平）。